

## 埼玉古墳群研究の新視点

平成10年は、史跡指定60周年、稲荷山古墳発掘調査30周年、鉄剣銘文発見20周年を迎えます。

さきたま資料館では、埼玉新聞社の企画に協力して、館外の研究者にも呼びかけ、その後の研究の成果や動向を、7回にわたって埼玉新聞紙上で紹介させていただきました。

この連載は、各方面から注目されましたので、同新聞社と各執筆者のご了解を得て、ここに転載いたします。テーマと執筆者は以下の通りです。

- 
- |              |      |
|--------------|------|
| 1 古墳群成立の背景   | 高橋一夫 |
| 2 古墳群の墳丘の規格  | 塚田良道 |
| 3 稀有な大型古墳群   | 吉川國男 |
| 4 稲荷山古墳の疑問解明 | 宮 昌之 |
| 5 古墳群の保存と研究  | 塩野 博 |
| 6 周辺遺跡からの探求  | 斎藤国夫 |
| 7 稲荷山の被葬者の出自 | 坂本和俊 |
-

発行所  
**埼玉新聞社**  
浦和市岸町6丁目12番11号  
郵便番号336  
電話 代表048(862)3371~4  
編集(直)862-3269~71  
郵便振替 00180-2-20988

THE SAITAMA SHIMBUN

## 埼玉古墳群

### 研究の新視点

▶1

埼玉県内には、現在一二三た。しかし最近では、低地部

基ほどの前方後円墳が確認さの埋没台地や自然堤防上に 埼玉古墳群が存在する行田

れているが、その大半は台地は、かなりの密度で遺跡が存 市、その周辺の熊谷市・妻沼

上に存在する。埼玉古墳群は埋没したローム台地上に立地

するとはいうものの、なぜ大な沖積地の真ん中に、一〇

〇メートル級の古墳が九基も築かれたのだろうか。

かつて、低地の考古学的調査は、「低地には遺跡は存在

しない」という既成概念から古墳群出現以前の遺跡の動向

調査の手はあまり入らなかつた。そこで、埼玉古墳群周辺の

等から、その成立の背景を探

在することが明らかになり、積極的に調査が行われるようになった。県下の考古学地図は変わりつつある。

### 古墳群成立の背景

高橋 一夫



町・羽生市の低地部で相次いで古墳時代初期の遺跡が発見されている。現在のところ、発掘調査された遺跡は一〇か所程度である。しかし、この地域は河川による氾濫土が厚

く堆積し、遺跡が確認しにくい状況にあるので、さらに多くの遺跡が地下に眠っていることが予想される。

こうした低地部の遺跡からは、必ずS字状口縁台付甕(S字甕)が出す。この名称は甕の口辺の部分が「S」の字形に立ちあがっていることからつけられた。もともとS字甕は、愛知県尾張地方の低地部で発生した土器で、弥生時代終末から古墳時代初期(三世紀末から四世紀前半)にか

けて東国各地で出土する。S字甕は、弥生時代には空白地帯であった地域から出土する傾向にある。利根川の対岸の群馬県太田市周辺は、弥生時代は無人地帯であったが、古墳時代になるとS字甕を多量に出土する遺跡が突如として出現する。こうした考古学的現象から、東海地方西部の人びとがその地に移住して低地を開発した、とする見

## 低地開発の集団

### S字かめを持って移住

解が有力である。S字甕をつ

くった人びとは、低地の開発を得意としていたようだ。

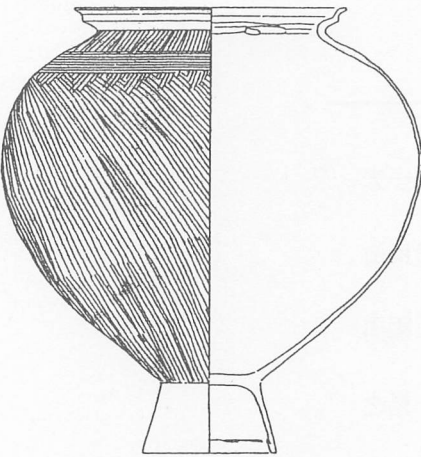
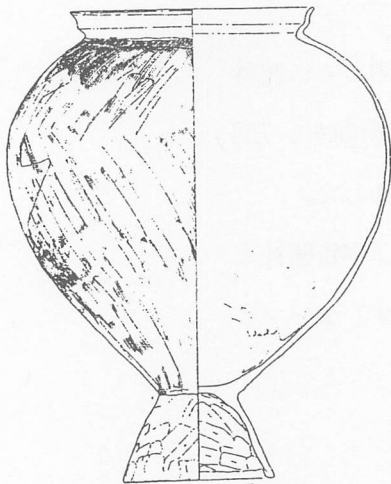
行田市周辺でも、弥生時代中期は池上遺跡などがわずかに存在するものの、それに続く遺跡はなく、古墳時代に突

如S字甕を伴う遺跡が出現する。類似する現象は単に行田市周辺だけでなく、草加市の毛長川流域に、さらには東京湾低地にもみられるのである。ここではS字甕をもつ人

びとが、低地を開発している様子を見ることが出来る。毛長川流域では、毛長川を眼下に見おろす台地先端部に、前方後円墳としては県内で最古の高稲荷古墳が造営された。

以上の点から、埼玉古墳群周辺もS字甕をもつ集団が開発主体となり、広大な低地を開発したようすが読みとれる。開発は成功した。開発の成功は、経済的基盤の確立と人口の増加をもたらした。開発指導者はしだいに大豪族に成長し、埼玉古墳群の造営へとつながっていくものと思われる。

(埼玉県立さきたま資料館 副館長)



①熊谷市小敷田遺跡のS字甕  
②尾張地方のS字甕

# 埼玉古墳群 研究の新視点

▶2



塚田 良道

八に対し一〇の割合の長さとなる。  
このような大仙古墳の規格は、前方部前縁が右上がり斜めになるものの鉄砲山古墳にも認められ、金錯銘鉄剣の見

古墳の大きさを比較するの山といった前方後円墳について、部分的な調査によっても、後円部が小さく前方部を営んだ王権に何らかの変化が認められる。近畿地方ではあまりみられなかった歴史があつた。千葉県富津市たのかもしいない。  
古墳の形は、古代の技術と政治関係をうかがう大きな手がかりをもっており、今後発掘成果を踏まえて、さらに研究を深めていく必要がある。

古墳の大きさを比較するの山と、稲荷山古墳が全長二二〇mで、大仙古墳(四八六m)のほぼ四分の一になる。また二子山古墳は一三八mで、これは稲荷山をおよそ一と八分の一倍にして築造された古墳にあたり、鉄砲山古墳は全長一〇九mで、二子山をほぼ八〇%に縮小したものである。築造順序は稲荷山→二子山→鉄砲山の順であり、埼玉古墳群の大形前方後円墳では、おそらく最初にできた稲荷山古墳に大仙古墳の形が導入され、

## 古墳群の墳丘の規格

内庁指定(徳天皇陵)の規格を縮尺して築造した古墳であることが分かる。大ききの比の仕方によって形が違つてし、率をみると、大仙古墳は後円

まう弊害があつた。このため近年、図面の縮尺率を変えて直接対比する方法が、文化庁記念物課の岸本文氏によって用いられている。

▽大仙古墳の規格を縮小

後者の方法で、埼玉古墳群の八基の前方後円墳を検討すると、武威最大の前方後円墳である二子山古墳は、日本最大の大仙古墳(大仙古墳・宮

径が全長の二分の一であり、後円部頂点と前方部頂点がそれぞれ全長の四分の一に位置する。また前方幅は、後円径

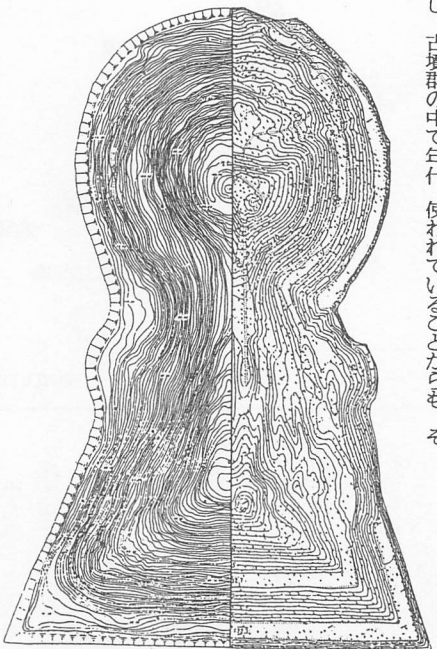
## 「近畿」の権力と関係

### 巨大古墳の形を縮小か

以後この規格を基本とし、大仙古墳を縮小して二子山古墳を築造された。古墳と共通する可能性が高と考えられる。  
愛宕山、瓦塚、奥の山、中

前方後円墳の形は、大きくみればどれも似ており、細かくみればそれぞれで微妙に違つている。しかし、こうした鍵穴の形が何らかの設計に基づいて造られたことは、いくつかの研究で明らかにされている。墳形の研究で興味を引くのは、しばしば地方において、近畿地方の巨大古墳の形を縮小した古墳が認められることである。その背景には、大王墓の設計を知った地方の王が、その縮尺率を変えて自らの墓を築いた歴史があつたのであろう。

古墳の形を比較する方法は、図面上にいくつかの基準



二子山(左)と大仙古墳(右)の墳形

# 埼玉古墳群

## 研究の新視点

▶ 3

た。埼玉の地は、利根川、荒川、和田吉野川―入間川の三水系をおさえる要地にあった。水の統御さえできれば、この流域の土壌は、秩父や上州三山から運ばれてきた沃土であったので、



吉川 國男



大型古墳の分布

類縁関係から、長らくつづくものと予想される。筆者は、『日本書紀』雄略天皇十一年の条に書かれている、「武蔵国直丁が天皇の近くに待宿していた」という記事に注目している。鉄剣銘の「平獲居臣が獲加多支爾大王のときに奉事していた」と符合し、平獲居臣在地説の強力な論拠になりうるからである。両史料は、埼玉の王者が大和朝廷の軍事機構の中核にあって、大きな役割を演じていたことを投影するものであろう。

黄金色の稲穂(こし)に百斤級の大型古墳を見ていると、古代の民衆のみならず、エネルギーに圧倒される。埼玉古墳群は、行田市埼玉にあって、東西九百斤、南北四百斤の間に十基の大型古墳が群在している。この密集ぶりは、大阪平野の百舌鳥古墳群や古市古墳群、奈良盆地の柳本古墳群とくらべても決してひけをとらない。国内的にも、世界的にも、稀有な大型古墳群といえることができる。この偉大な大型古墳群をめぐると、疑問点は、じゅうぶん解明されたとはいえない。

今でこそ平坦な穀倉地帯であるが、もとはといえは、利根川、荒川の乱流地帯。地盤が沈下する関東構造盆地にあるため、氾濫を受けやすい洪水常襲地帯でもあった。上空からの下流一帯を望むと、北西から南東に向かって、洪水のツメで

### 稀有な大型古墳群

ひっかいたような地形が縞模様をなして末広がっている。

## 三水系の要地に造る

### 大和朝廷と密接な関係

その頃の利根川は、行田と羽生の間から南下して越谷あたりで荒川を合流して、東京湾に流れていた。埼玉の王者は、流域の住民を役立て、洪水を封じこめるため河川の築堤工事を

長によってすすめられ、開拓に成功するたびに、影響を及ぼし、流域の集落を掌握し傘下を拡大していった。紀には多摩川下流域にとっ

この成功と実力を大和朝廷が見逃すはずがなかった。仁徳天皇の十一年に、武蔵の人強頼(こわくび)を大坂淀川の茨田(まん)に書かれているのは、その間の事情を物語るものであ

今後この議論は、出土品や墳丘、埋葬主体部の前後(長)

# 埼玉古墳群 研究の新視点

▶ 4

稲荷山古墳は風土記の丘

整理事業に伴う最初の発掘調査として昭和四十三年に行われた。古墳からは礫礫と粘土礫と呼ばれる二か所の埋葬施設が発見され、出土品は「国宝武蔵稲荷山古墳出土品」に指定されている。昭和四十八年度には周堀の調査を行い、二重の堀を持つ全長百二十メートルの前方後円墳であることが確認された。

昭和五十三年には、保存処理中の鉄剣から百十五文字の銘文が金象嵌された「金錯銘」が発見された。銘文解釈・被葬者について多くの学説が発表され、論

争は現在も続いている。

このように全国的にその名が知られ、教科書にも登場する稲荷山古墳であることが、古墳の前方部は昭和十三年の土取りのために削り取られたままになってい

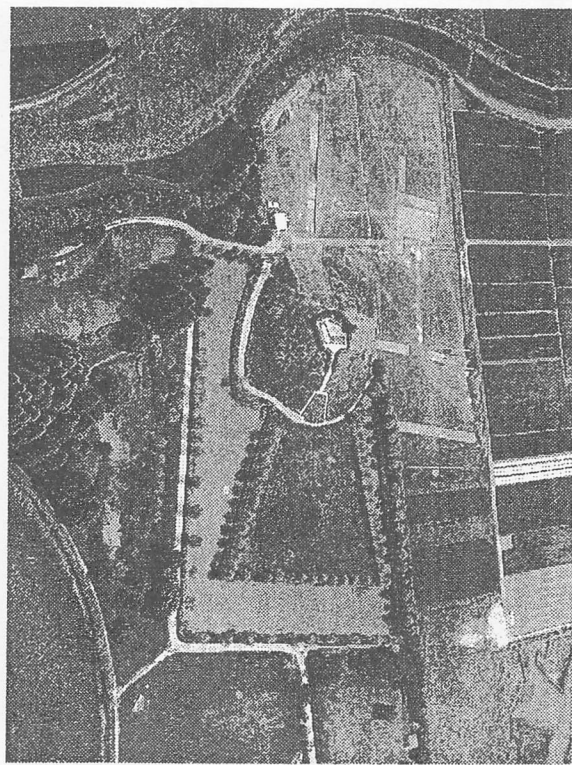
見されている礫礫と粘土礫の位置は、後円部の中心を外れてL字形にある。このことから、後円部中央に稲荷山古墳本来の被葬者のための埋葬施設が存在する可能性や中心を外れた他の埋

## 稲荷山古墳の疑問説明

宮昌之



る。稲荷山古墳からは辛亥年が始まる実年代が分かる資料が出土している。辛亥年は西暦四七一年と考えているが、六十年後の五三一年とする研究者も多い。これは、埋葬施設の副葬品や堀から出土した埴輪などが



## 中央に本来の被葬者?

### 築造時期示す証拠に期待

葬施設の存在も考えられよう。第二は、古墳の年代であるが、古墳の年代であ

る。特に須恵器は年代決定の指標となりうる。このことから、今後の発掘調査における出土が期待される。

また、稲荷山古墳築造の時期には、群馬県榛名山二ツ岳が爆発し、埼玉県北部にまで火山灰が降下している。この火山灰はFAある

丸墓山古墳はかつて稲荷山館学芸員)

古墳に先行する古墳として扱われていたが、墳丘下にFAと推定される層が発見され、埴輪もやや後出の要素がみられることから、現在では稲荷山古墳に次ぐ時期に考えられている。両古墳の堀は接近しており、両者が重複し、切りあい関係があるのか、どちらか一方がよけているのかを解決させておく必要がある。これらの問題を解決するため、平成九年度から五年計画で、文化庁からの補助を受け、整備を実施することになった。消失している前方部に盛土を行い、発掘調査の成果をもとに堀位置の完全な復原を実施する計画である。

平成十四年春、新たな姿に生まれ変わる稲荷山古墳に期待していた。資料

# 埼玉古墳群

## 研究の新視点

▶ 5

さきたまの古墳は、江戸時代に『新編武蔵國風土記稿』や『忍名所圖會』、明治十年福田一磨著『埼玉縣地理抄』、四十年に清水雪翁が著わした『北武八志』など地誌類に広く紹介されている。考古学者では、明治三十八年柴田常恵が、將軍山古墳出土の遺物を表見し、発見状況と遺物を『東京人類學會雜誌』に報告し、学術的な考察をしたのが初である。昭和十年、後藤守一が考古學會總會で「前方後圓墳の編年」を発表、埼玉古墳群の前方後円墳の主軸が、「同一方向に採ってゐる」との見解を示した。

また十三年、三友國五郎の「古墳群と平野」は、歴史地理的観点から立地と当時 景観を復原している。さきたまの古墳は、江戸時代に『新編武蔵國風土記稿』や『忍名所圖會』、明治十年福田一磨著『埼玉縣地理抄』、四十年に清水雪翁が著わした『北武八志』など地誌類に広く紹介されている。考古学者では、明治三十八年柴田常恵が、將軍山古墳出土の遺物を表見し、発見状況と遺物を『東京人類學會雜誌』に報告し、学術的な考察をしたのが初である。昭和十年、後藤守一が考古學會總會で「前方後圓墳の編年」を発表、埼玉古墳群の前方後円墳の主軸が、「同一方向に採ってゐる」との見解を示した。

### 古墳群の保存と研究

取で破壊され、埼玉古墳群でも土採取の危機が迫り、村では昭和十年五月に丸墓山・二子山・鉄砲山古墳の保存を具に要望した。具は即仮指定すべく、六月文部大臣に申請した。文部省は「三古墳ノミニ止マラス附近ニ存スルモノヲモ併セ古墳群トシテ一括保存可致モノト被認」との見解を示し、『官報』に指定を告示し、埼玉村を管理者に指定した。村では十四年三月に丸墓山古墳の村有を契機に「埼玉村古墳保存會」を結成し記念碑を建立、十四年度から保存施設の工事を行ない保存に万全を尽くした。しかし戦後、食糧事情から幾つかの古墳に鉄先が向けられた。瓦塚古墳の一部が、開

## 特異な長方形周溝

### 畿内にはない強い地域性

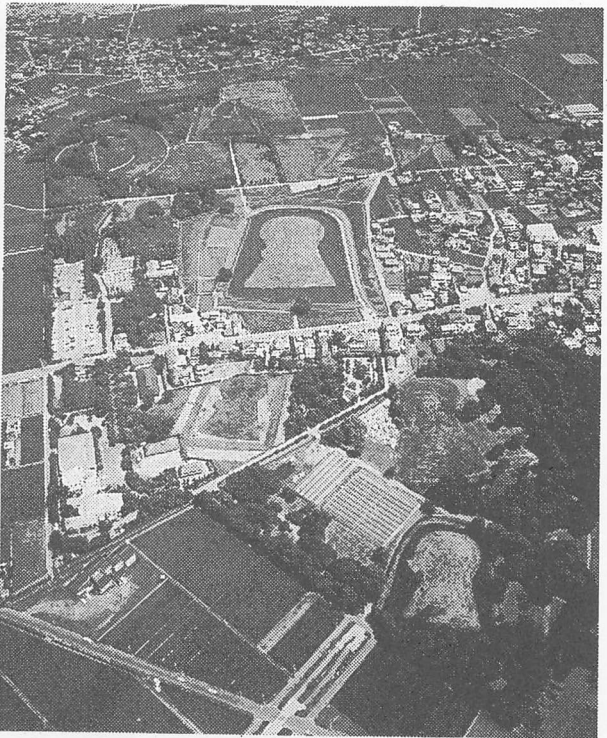
定調査ヲ要求スヘキモノ」と決定、具は国指定史跡の申請を行なった。文部省は、十二年一月と十月に実地調査、十三年八月八日付け『官報』に指定を告示し、埼玉村を管理者に指定した。村では十四年三月に丸墓山古墳の村有を契機に「埼玉村古墳保存會」を結成し記念碑を建立、十四年度から保存施設の工事を行ない保存に万全を尽くした。しかし戦後、食糧事情から幾つかの古墳に鉄先が向けられた。瓦塚古墳の一部が、開

補助金交付を申請、実現し、稲荷山古墳の主体部を掘削調査を行ない、以来、三十年経つ現在も、学術調査と並行しながら着々と整備が進められている。この「風土記の丘」事業を新設した。初年度は懸案の鉄砲山古墳の公有地化、四十二年度から「風土記の丘の整備事業」が開始された。四十二年に瓦塚古墳を公有地



塩野 博

玉村を管理者に指定した。村では十四年三月に丸墓山古墳の村有を契機に「埼玉村古墳保存會」を結成し記念碑を建立、十四年度から保存施設の工事を行ない保存に万全を尽くした。しかし戦後、食糧事情から幾つかの古墳に鉄先が向けられた。瓦塚古墳の一部が、開



埼玉古墳群全景

伴出した遺物も含め「国玉」に指定されるなど、昭和十年代以来三十年ぶりの活気が甦がえったのである。整備事業から得られた成果は、大型古墳の企画的配置から同じ血筋の中で首長権が継承されていること、埼玉古墳群の前方後円墳の周溝の形態が長方形を呈した特異なもので、東国では千葉県舟塚原古墳、殿塚古墳、姫家古墳に確認されているだけで畿内に見られない強い地域性が看取されることなど、稲荷山古墳被葬者の自出や人物像、東国最大の埼玉古墳群の性格を考える上で次々と大きな問題を提起している。私たちはこの、かけがえない埼玉の地宝「埼玉古墳群」の内包する問題を広い視野から探究し、先人そして現在も保存整備に努力している人たちに報い、さらに日本古代史研究に資するため精励しなければならぬ。(埼玉県教育局文化財保護課長)

# 埼玉古墳群

## 研究の新視点

▶6

群が発見された。すでに調査されている大型の前方後円墳の周囲に小円墳群が造られる形であったと思われるが、それは他の古墳群を見ても一般的な形である。しかるに埼玉古墳群では、

稲荷山古墳から出土していた鉄剣の保存処理中に一五文字の銘文が発見されたのは昭和五十三年であった。最初は銘文に刻まれた「辛亥の年」から辛亥銘鉄剣(しんがいめいてつけん)と呼ばれ、やがて国宝指定に伴い、銘文が金象嵌されている特色から金錯銘鉄剣(きんさくめいてつけん)と呼ばれるようになった。呼び慣れた名称が変わったことに戸惑ったことが思い出される。あれからも二十一年近く経とうとしているが、その間断続的にはあるが、筆者は埼玉古墳群周辺の多くの遺跡の発掘調査に従事してきた。銘文発見

### 周辺遺跡からの探求

斎藤 国夫



## 朝鮮半島の強い影響

### 6世紀中頃に転換期

当時の堅穴住居の集落は、古墳群から見て東側に小針(こばり)遺跡が確認され

九基の大型古墳を築造し続けた古墳の被葬者達が、どこに住んでいたのか。築造

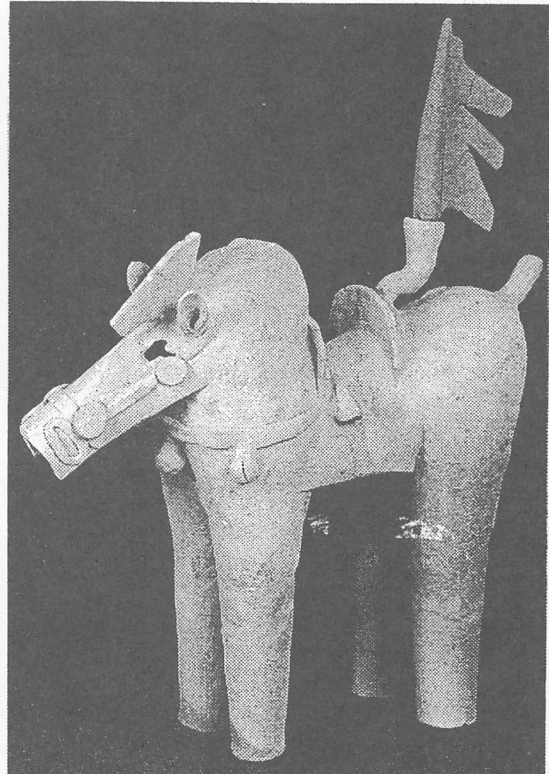
次に筆者らが最近発掘調査した行田市藤原町の北大半に小円墳群が造られるが、それ以降は大型の古墳

を排除している形といえる。小円墳群がはっきりしたが、問題は、馬兵の装備と同じものであ

る。その装着状態を埴輪で表現したのが、行田市酒巻十四号墳出土の馬形埴輪であるが、十四号墳の人物埴輪の服装などにも朝鮮半島の影響が強く残されている。こうしたことから六世紀中頃に、この地域に大きな転換期があったと想定できるが、それが何か。埼玉県埋蔵文化財調査事業団が行っている行田市の築道下遺跡では六世紀を中心に七百軒以上の堅穴住居が狭い範囲に密集して発見されているが、そのこともこうした事象と何等か関係しているはずである。

以上の他にも多くの問題が残されている。埼玉古墳群自態の発掘調査とともに、周辺の遺跡発掘調査を通して、これらの問題解決の糸口をつかみたい。

(行田市教育委員会生涯学習課課長補佐)



# 埼玉古墳群

## 研究の新視点

▶ 7

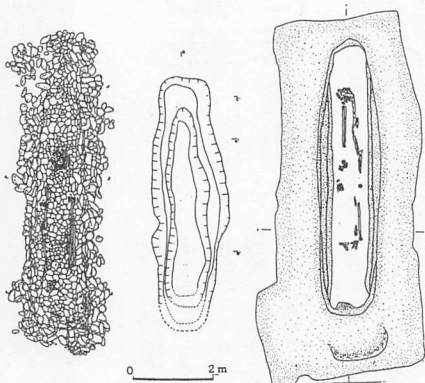
稲荷山古墳の墳頂に立つて礫塚と粘土塚を見ると、いずれも浅い位置にあり、墳丘中軸線上に無いのが観察される。このことは、

第三の埋葬施設と礫塚及び粘土塚の被葬者は親子であったと推定される。親と一緒埋葬される者が、天皇に供献したことが『高

これは、稲荷山古墳の粘土塚と礫塚に置かれた木棺が舟形を呈すると考えられることも関係がある。千

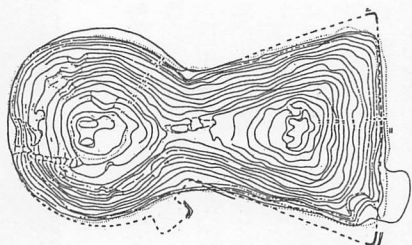


坂本 和俊



舟形木棺を安置した埋葬施設の平面図

左 稲荷山古墳礫塚 中央 同粘土塚 右 山王山古墳粘土塚



太線 稲荷山古墳 細線 二子塚古墳

稲荷山古墳と姉崎二子塚古墳。(6:5)

### 稲荷山の被葬者の出自

それは、礫塚・粘土塚の副葬品、括れ部の須恵器より、円筒埴輪がやや古い特徴を持つことから言える。

彼は自分の古墳を造る地位、即ち親の職掌を継承する立場に無かった故に、後

礫塚の被葬者としてから出土した鉄剣に記された平獲居臣の関係を、第三の埋葬施設が存在する前提で考えてみよう。稲荷山古墳のように複数の埋葬施設がある古墳の被葬者の親族関係を齒から分析した田中良之氏の研究を参考にす

## 上総の豪族の子孫か

### 第三の埋葬施設を想定

橋氏文』に記されることも想定される。膳臣もオヒコを祖する氏族だからである。この記事は、武蔵国造の上祖が上総で漁業を行っていたことも想起させる。これは、景行天皇が伊勢を経て上総に到った時に、

後円墳に比べると前方部が短い、山王山古墳を初めとする姉ヶ崎古墳群の前方後円墳には埼玉古墳群同様に前方部が長く、周溝が長方形になる可能性もあるものが多い。特に時期・墳形総国上海郡の検前舍人直健麻呂、武蔵国賀美郡の検前舍人直由加麻呂はその子孫である。さらに『国造本紀』は、上海郡の隣の市原郡域に置かれた菊間国造を武蔵国造の子と記す。

市原郡域にある山倉一号墳の埴輪が、埼玉古墳群に供給するため形成された鴻巣市生出塚埴輪窯から供給されているのは、『国造本紀』の記述が一定の史実を反映することを示唆する。武蔵国造の子が菊間国造に就任するに際して、同族の上海上国造の支援があったのなう。国造制は、山倉一号墳の築造された六世紀後半に成立すると考えられる。

このように埼玉古墳群の形成は、考古資料と文献の両面から見る必要がある。(県立本庄高等学校教諭)